

クリスマスの前日談

ヨハネの福音書にイエスの誕生物語は載っていませんが、いわば前日談と言えるもの、つまり誕生物語で告げられていることに至る経緯が書かれています。ヨハネの福音書は、救い主イエス・キリストについて、2千年前に地上のベツレヘムでお生まれになるはるか昔である万事の初めの時、私たちの世界が存在する前にまでさかのぼって、話をしているのです。ここに書かれたことを理解するならば、イエスがどんな方であり、なぜ来られたのか、また何を成し遂げられたのかが明確になってきます。

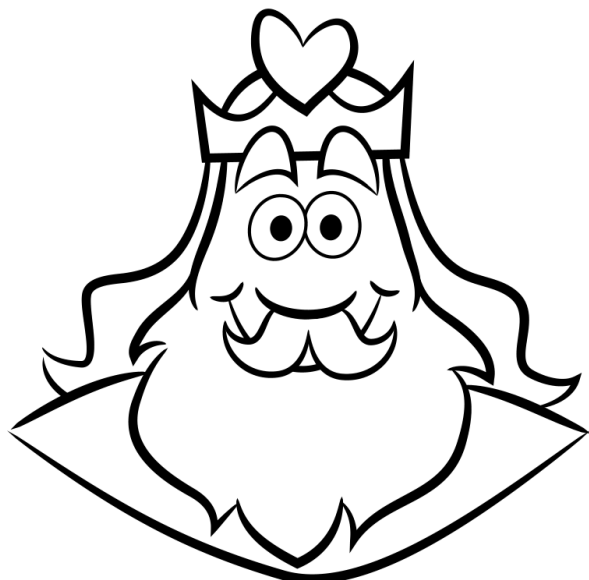


この物語は、次のように始まります。「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は初めに神と共にあった。すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。」(ヨハネ 1:1-3)

ヨハネは、宇宙の創造が始まる前、時が存在する前にまでさかのぼって、この『言』がすでに存在していたと告げているのです。この福音書は、聖書巻頭にある創世記の最初の言葉と同じく「初めに」で始まります。これは、この『言』が創造の前に存在していたこと、永遠の存在であること、『言』の存在しなかった時というのではないことを表しています。『言』は、創造されたものの一部ではなく、言い換えれば、どんな被造物よりも偉大な存在です。

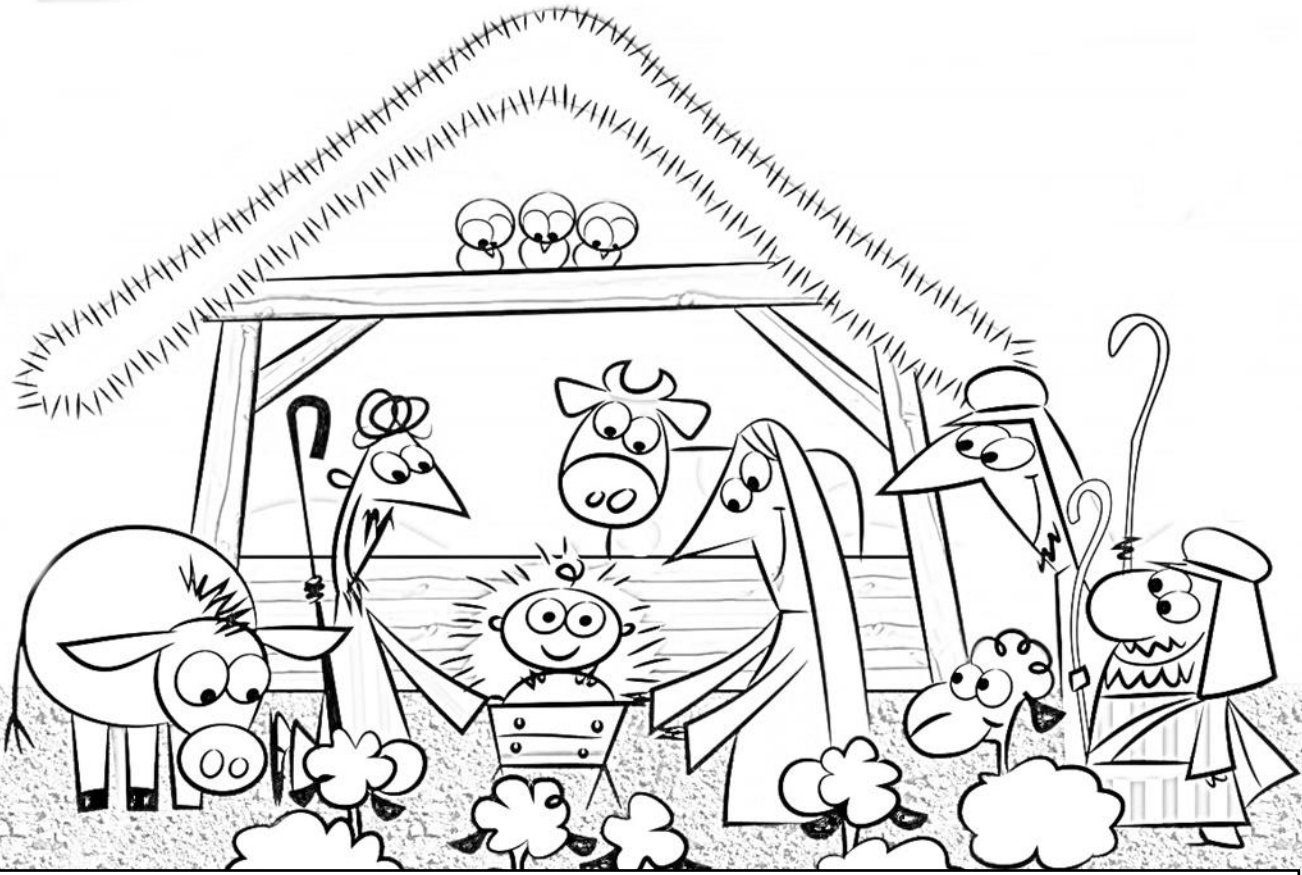


「言は神と共にあった」、そして少し後に、もう一度「この言は初めに神と共にあった」と書かれており、『言』が神との親密な関係を持って存在していることが強調されています。「言は神であった」という箇所には、神と『言』との一体性が表現されています。

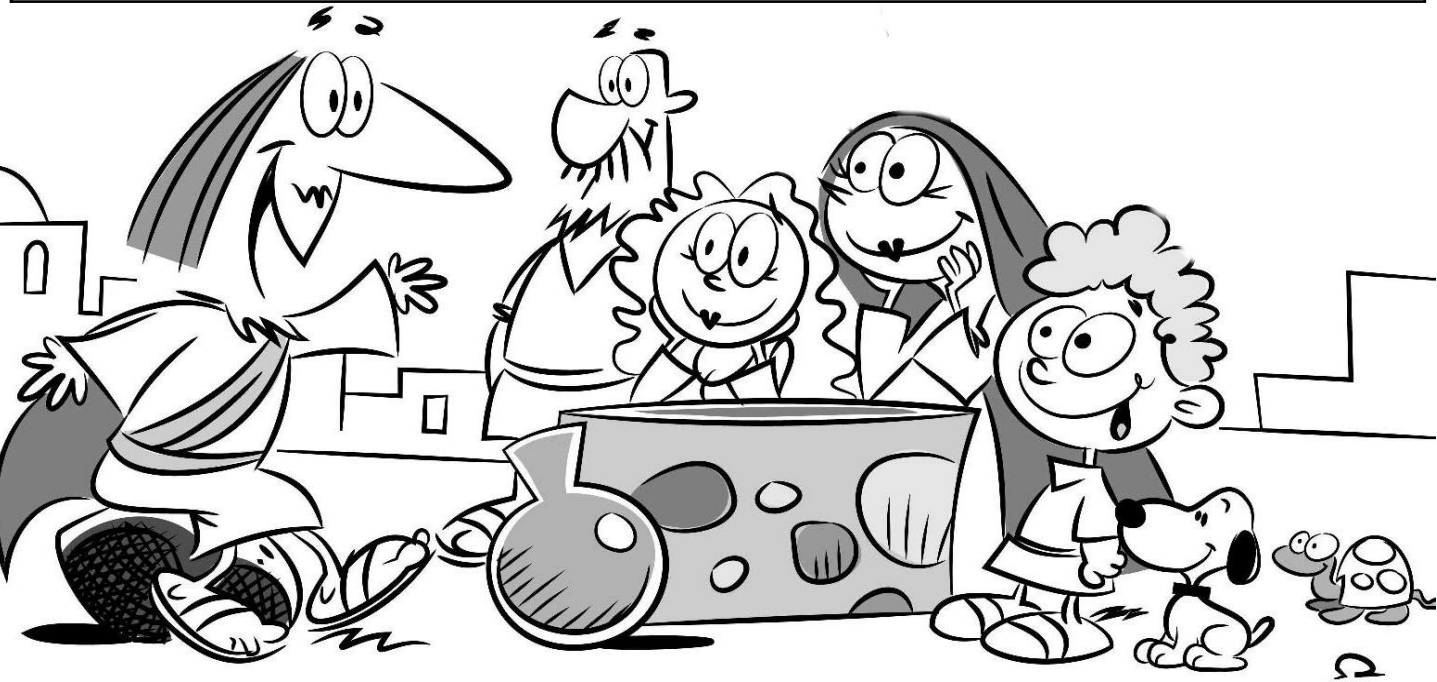


神について言われていることは全て、『言』についても言えるのです。

これこそ、私たちがクリスマスにお祝いすることです。『言』と呼ばれ、天地創造の前から神と共に存在しておられた方、父なる神と直接の交わりを持たれていた方、万物の創造に関わられた方、自存（何ものにも依存せず存在）しておられる方、子なる神である方が、人間として生まれ、人間として生きられたことです。



イエスが地上におられる間になされたことは、話された言葉や語られたたとえ話も、人々との触れ合いも、当時の宗教指導者との対決も、起こされた奇跡も、その全てが、人類に対する父なる神の愛、配慮、思いやりの表れです。





受肉した（人間の肉体を持って生まれた）
『言』であるイエスのおかげで、私たちは神について、また、神の願いである人類がご自身と和解できるようにということについて、より深く理解できるようになりました。このように、クリスマスは、私たちが神と共に永遠に生きられるようにと、神が私たちの世界に来てくださったことをお祝いする日なのです。

『言』は肉体を持った存在となり、私たち人間とともに生きてくださいました。何と素晴らしいお祝いの理由なのではないでしょうか。